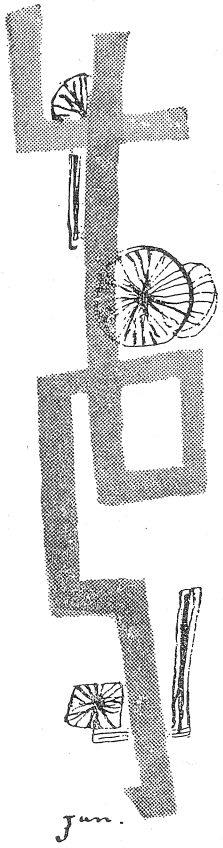
文部時報

第 990 号

昭和35年２月



昭和34年度学力調査

新しい教育課程における学力観　沢田　慶　輔…2
小学校国語の調査結果の概要　沖山　光…12
中学校国語の調査結果の概要　渋谷　宗　光…18
高等学校国語の調査結果の概要　藤井　信　男…23
小学校算数の調査結果の考察　中島　健　三…29
中学校数学の調査結果の考察　大野　清四郎…35
高等学校数学の調査結果の考察　天草　卯…40

座談会　欧米諸国を視察して……46
北岡健二　木田宏　伊藤良二　伊橋虎雄
高山忠雄　後藤金好　佐藤一男

日本学校安全会法の視要　渋谷　敬　三…61
中央教育審議会の動静……66

文学のあけぼの（一）　金田一　京助…76

長欠児童生徒は減少している　村井　審…85
学生生徒の体位と健康状態　坂上　晴　美…95

文部省関係出版物リスト……22
文部省重要通達一覧……96

表紙　斎藤洋子　カット　正木淳

文学のあけぼの（一）

―アイヌの叙事詩ユーカラについて―

金田一京助

「何のためにアイヌ語をやったのか」と、しばしば質問されますが、私も一生アイヌ語と取り組もうとは思いもよりませんでした。私が大学の言語学科に進みましたのは、日本語が世界の言語の一つとしてどういう特徴を持ち、どの言語と姉妹関係にあるか、日本語の故郷はどこか、そういう問題をきわめたかったからです。そうしますとその第一歩として、日本の周囲の諸民族のことばと日本語との関係を明らかにしなければなりません。私の同窓では、日本語と琉球との関係を研究した伊波普猷、支那語との関係を調べた後藤朝太郎、朝鮮語を修めた小倉進平博士、恩師の藤岡先生は、満州語と蒙古語の研究をなさいました。

アイヌ語と日本語の関係はだれかがきわめなくてはならぬ問題でした。ことにアイヌは日本にしかいない民族で、古くから日本と接触していますので、当面第一の問題でした。しかし、アイヌは文字を持っておりません。そのため古いアイヌ語の記録というものはありません、アイヌ語を調べるといっても、今日アイヌが口にしていることばを彼等のように話すだけの実用の目的なら、アイヌはみんな日本語を知っているので用は足りますし、研究のやりがいも、そうありません。それでアイヌ語の研究家が出なかったのです。

ジョン・バチラー氏のアイヌ語の字引きが出たのは、私が大学の二年生の時ですが、さっそく手にして見ると、やはり西洋人らしい解釈で、どのページにも未解決の問題が充満していました。日本人の頭で考えたら別の答えが出てきはしないかというような問題がいっぱいあるのです。それで、私はアイヌの村にいって、

アイヌ人の口に響いていることばを、この耳で聞き、この頭で考え直したい欲望を感じたのです。とうとう夏休みになった時、銀行をやっていたがもとは漢学者で、ことに和算が専門だったおじに相談しました。おじは学問に対する興味を持っていましたので、「なるほど、これからの学問は白いものに黒く書いたのを読むばかりがそうなのではあるまい。そういう学問の仕方もあるだろう。いってこい。」と旅費を出してくれたわけです。

青森から船で、室蘭に上陸して西の方の有珠虻田のアイヌ部落にいき、一度室蘭に帰って東の方の幌別、白老の部落を訪れ、さらに胆振のいちばん東の鵡川にいきました。その時一人の老人が申しますのに、「だんなはそうしてアイヌのことばを調べているが、アイヌのことばにも、ふだんのことばのほかに、大昔からの祖先がやったことを古いことばで歌い伝えているユーカラがある。まだ日本人も西洋人もこれに手をつけていないが、これを調べてこそアイヌ語を調べたといえるだろう。」という。私には耳よりなことでしたから、ほんとうにそうかというと、同じアイヌでも心のない者にはわからないほどむずかしいというのです。神さまのことをアイヌ語ではカムイといいますが、「そのユーカラのことばでは神さまを何というか。」ときいたら、やはりカムイはカムイだという。じゃあ違わないじゃないかといったら、みんな笑って「いや、それでも違う。」というのです。ちょっとその前、アイヌ語で『打つ』ことをキックといい、『私が打たれた』という時、語頭を変化させてアエンキックということを調べたばかりでした。それで「私が打たれた」をその古いことばでは何というのか、アエンキックというのかというと、みんなまた笑った。チコモナシアイエカラカラだというのです。辞書を引いてもそんなことばはない。ふしぎなこともあるものだと心残りに思いながら、翌日アイヌの巣窟といわれる日高沙流川の川口の佐瑠太へいきました。そこで五、六人のアイヌ人に会い、ユーカラというものがあるそうだなといったらびっくりした顔をしていました。そのユーカラのことばを教えてくれないかといったら、顔を見合わすだけで教えてくれない。そこできのうと同じ質問をすると、少し違って、チコモナニアイエカラカラという。だいたい同じで私がだまされているのではなく、ことばが少し違うのは方言の差かも知れない、とにかく、ふだんのことばのほかに別なむずかしいことばがあるとにらんだのです。

いよいよ沙流川をさか上ってアイヌの都といわれる平取（ビラトル）へいきました。宿にたのんで物知りじいさんを呼んでくれるようにいうと、白ひげ白髪（はく）のじいさん平村カネカトク翁がきてくれました。そこで「ユーカラを聞きたくてきた。」というと、そのじいさん、にやっと笑っていましたが、「よろしい、聞かせてあげよう、しかしこっちの耳から入ってそっちの耳から出ては何にもならない。ちゃんと書いていったらどうか。」という。願ったりかなったりで、よろしいといって鉛筆を削って、「さあじいさんいってくれ。」といいましたら、じいさんは、

イレシュサポ　イレシュパヒメ
ランマカネ　カッコロカネ
オカアニケ　……

こういうふうにいい出したが、何のことかまるっきりわかりません。しかし、一口々々出ることばの長さはだいたい同じで、割合いに筆記しやすかった。が、書くよりもいうほうが早いもので、私は全身汗になって、追っかけ追っかけ書いた。苦しいのなんのってないのです。早く終わってくれと思うのにどうしてもおしまいにならず、いくらでもやる。とうとう削った五、六本の鉛筆がみなちびたので「じいさん、すまないが少し鉛筆を削るから」と、実はひと息ついて、鉛筆を削りながらいま書いた所を何となくひっくり返してみますと、十幾枚も書いていました。そうしようと考えて書いたのではないのに、どのページも、中央がすっとあいて、英語の詩集でも開いたようです。ローマ字で書いたものですから。これは散文ではなく韻文で、詩の形で昔のことを語り伝えていたのだなと考えました。

ヨーロパでは、ギリシャ語でエポス、英語でエピック（叙事詩）というものではないか。人類が文字を持たなかった時、忘れると大へんだと思うことを懸命になって暗記したものだそうで、祖先のやったことが聞いて楽しい材料でもあり、彼らはそれを本当に信じますから、文学であると同時にまた歴史で、さらにけしからぬことをした者を戒める時にその文を使うので聖典にもなり、他の部落との問題を論議するものにも引用するので法典のような性質も持っている。ギリシャ時代の「イリアッド」と「オデッセイ」という神話の詩もそうで、暗唱して伝えていた古くからのものを、ホメロスの時代に文字が入り、初めて書きしるしたのが後世に残ったのです。アイヌは文字がないため、やはりそうやっています。われわれの国でも古代には文字がなく貴賤老少口々相伝え存して忘れず、といわれるけれども、果してどういうふうに伝えていたか今日からは知ることがむずかしいのです。アイヌが目の前でそういう生活をしているのだということに気が付くと、眠いの疲れたのと思う気持はへし飛んで、どうしてもこれを全部書き取ってしまわなければならないと、興奮して書き続けました。とうとう十二時過ぎまでかかってしまって、へとへとになりましたが、何ともいえないほどうれしかったのです。歌い終わってじいさんがいうのには、せっかく書いて東京に持って帰っても、何が書いてあるかわからなくては駄目だろうと、どの部分の説明かわかりませんが、粗末な日本語で—そういうことを知っている人は日本語はへたで、東北の労働者とつき合って東北の方言を知っており、その粗末なことばも幸い私は東北人ですからちっともわからないことはありません—ボツリボツリ聞かせてくれました。それをノート・ブックのあいているところにいっぱい書き込んで、他日訳をつける時の参考にしようと思ったのです。それはこういうことだというのです。

幼少の子どもが愛されて育てられ、おもちゃの小弓と矢を作って与えると、それで家中の道具をポッンポッンかまわず射飛ばしている。それでも養育者はにこにこ笑ってうなづいている。そのうち養育者が殺され、恐しい他家のばあさんがそのなま首を持って、子どもが一人留守居をしているところへやってくる。子供がわっと泣くと、「まだほんの赤ん坊だな」といって、家の隅のなべを持ち出し炉にかけて、なま首をぐたぐた煮て、それを食べろ

と出したのでなお子どもがわっと泣く。泣いて泣いて泣いて泣きながら—アイヌの信仰では偉い者は泣きながら神がかりになるのですが—いままでわからなかったことが急に目に見えるようにわかってくることがある、と伝えているのです。その子どもの家は北海道のトメサン別川のほとりのシヌタプカという所の城で、父と母に育てられていた。或る年その子どもを母親が懐に入れ、父母が一そうづつの丸木舟をこいで外国に物々交換にいき、よい宝をたくさん交易して持って帰る途中に、岸から酒だるなどを見せたりして寄っていけと招かれる。父親は寄っていこうと思って舟を陸の方にこぐが、母親は帰りを急ぐ。二つの舟がずっと隔ってしまうと、父親が仕方がないと舌打ちして母親の方へこぐ。次の海岸を通った時また呼ばれて、父親の方は岸へこぎ、母親は沖へこぐ。舟がたいへん隔った。こんどは母親が仕方がないと舌打ちして、父親にゆずり岸へこぐ。岸では大へんな歓迎で酒が出された。そのうち酒の上でけんかがはじまり父親が命を落してしまい、母親は父親の物の具を身につけ、子どもが手足まといになるので、谷を望んで、夫のおがんでいた神があるものならどうぞこの子を助けて下さいといい、谷の底へ転がり落してから弔いいくさに出て、母親も死んでしまう。谷底に落ちた赤ん坊ですが、泣いているとそこへ女が通りかかって拾い上げる。子どもが無心に笑うものでかわいくなり、これを村に連れて戻ると敵の片割れだと殺されるのがかわいそうで、女は人もかよわぬ遠いところに身をかくし、雨露をしのぐ形ばかりの家を作り、川へいって魚をとる。また鹿狩りで山から皮をむき肉を骨から取ったあとの残りを拾ったりして、何年か子どもを育てる。しかし、その村に八卦の強いばあさんがあり、女が敵の子どもを育てていることを見付け、女は殺されてしまう。それで子どもはただわあわあ泣いているが、神がかりして、家を飛び出し、結局養育者のあだを報いる。一方、国に置かれていた長男は、いつまでも父母が帰らないので、とうとう後を追って舟で探しにくるが、父も母も死んだことを聞く。怒ってその村を荒らしつくす。しかし弟が死んだのをだれも見ていないので、弟を探す。兄弟は出会うが、兄は弟と思うけれども弟は何も知らないから刃向かうので、兄が、もし私が間違いなら私が敗れるしお前が誤りならお前が敗ける、尋常に勝負して是非曲直を正そうといって二人で戦うが、弟が敗けてしまう。初めて兄のいうことが正しいとわかって、いっしょに力を合わせて父母のかたきを討つということになった。しかし、敵国には魔法に大へん秀でた女がいて、その術にかかり縄にかかって殺されるばかりになる。が、敵の中にもう一人若い占いや八卦にすぐれた婦人がいて、かねて自分の夫になる人がどの方角からくるかを知って、この兄弟がそれだとわかった。それで村の人を裏切ってこの兄弟を助け、相たずさえて兄弟の村に帰っていく。

「それでいい」といってじいさんは終わったのです。ずいぶん長いのですが、実はこれは物語りの第一段だったのです。

とにかくこれを持って東京に帰ったのですが、いまざっと梗概を申しましたが、そうとわかるには、ほんとうは五年かかったのです。何しろ、文法と語彙をはっきりさせなければいけません。樺太にもアイヌがいて樺太方言というものがあり、これを探検し

て北海道と樺太のことばを比較していったら、両方のことばの分かれる以前の原形にさか上ることができるだろう、そうするとユーカラの意味がわかっていくだろうと思われた。それで、どうしても樺太へいきたくていましたら、明治四十年に、地質学の方から、私の中学校の同窓だった下斗米秀次郎が神保小虎博士といっしょに軍部のために石炭探検に出かけるというので、文科からもいかなくてもいいかとつごうよくさそってくれ、どういうふうに、どこへいったら研究が遂げられるかの指図や教えを神保博士にうけて、出かけました。

東京をたったのが明治四十年の六月、まだ卒業の成績もわからず、卒業したかどうかさえわからないまま、学生服に学生帽で出かけました。小樽を出て樺太の海岸についたのは七月十二日で、内地は暑いさかりでしたがちょうど山桜が咲いているのが見られました。この時の話しは「心の小道」という短文に書いて、文部省の教科書や三省堂の教科書にものっておりますので、ご承知のかたもあるかと思います。いったばかりのときにはだれも相手にしてくれないで困って、子どもたちが無邪気に私にとんちゃくなく騒いで遊んでいたから、それを聞き取ろうとしたのですが、耳にとまらぬ発言で弱ったのです。しかし、「何」ということば一つを発見することで—「何」はヘマタですが—いろいろなものをヘマタ、ヘマタといってきくと、向こうからわれ先に名前を答えてくれ、私が、子どもによって樺太アイヌ語研究の目を開いた、という話しなのです。アイヌ語の下地があるので、そこに四十五日滞在することでだいだい話しがわかるようになった。驚いたことに樺太の口語が、北海道のユーカラの文法と同じだったので、樺太にいったことは私にとってほんとうに有難いことでした。

「心の小道」のおしまいに「北蝦夷古謡遺篇」三千行を手みやげに、この人たちと別れて帰ったと書きましたが、その部落について十五日目位だったでしょうか。ラマンテというおやじが私のわきに、仰向きに寝て、片方の手でひばらをたたきながら、浪花節のような声を出しました。北海道でのユーカラは、一尺ばかりの棒で炉ぶちをたたきながら演奏し、聞く方もてんでにそういう棒を用意して座を叩き、うたう人と聞く人とが太い声で相和して進行していきます。が、谷元旦（げんたん）の「蝦夷紀行」の附図に「蝦夷浄瑠璃を語る図」があり、おやじが仰向きに寝て目の上に片手を乗せ、片方の手で腹をたたいています。まさかと思っていたら、ラマンテが目の前でそれを実演した。ギリシャの叙事詩でもやはり棒で座をたたいて、その伴奏で歌うものだったということです。これらの伴奏ではまだ棒だの炉ぶちだのが必要ですが、もっともの原始的なものはラマンテのやり方で、自分で自分のひばらをたたくので道具はいりません。これが最も原始的な演奏の仕方で、はからずも樺太の旅でそれを目にすることができました。支那の古い本に鼓腹撃壌の楽しみといって「撃壌の歌」というものがあります。鼓腹とは腹を鼓にし、撃壌は地べたをたたくことです。歌の内容は、日が出ると耕し、日が入ると休む。土を耕してものを食べ、井戸を作って飲み、天子など堯でも舜でもわれらのかまうことではないというのですが、樺太の叙事詩の演奏がその言葉どおり、こういう人間の最初の文学の演奏の場を見たのは喜ばしい

ことでした。そこで私は、「おいおいラマンテ、君のそういう結構なものを、左の耳から聞いて右の耳から出しちゃもったいない。ぼくがそれを筆記して、ラマンテというアイヌはこういうことができた。こういうことを知っていたと東京のだんなたちに吹聴するし、後世にも残すから、もう一ぺん初めから聞かせてくれないか。」といったら、書くなんぞということができるかという気だったらしいですが、「よしよし、じゃあ書け。」といってやり出しました。

コンラモノワ　タノウメチャチャ
テンコンキレシキ　イエカラカラ
トーピシパーケタ　イヨッセレケレ
アナマヨイエ　ランペシクンネ
コメウナタダ　シンコトテッシ
プヤッケサパハノ　チウレンカイ

なんのことかちっともわかりませんが、私はいっしょう懸命書いた。十幾枚も書いた時、「だんな、どういうふうに書けた」というから、「よんでみるから、少しでも違っていたら注意してくれ、直すから。」といって、大声で朗読しましたら、ラマンテは喜ぶの喜ばないの、「みんなどんなものだ、みんな何度教えても覚えないのに、このだんなはきたばかりで、一度で覚えたぞ。」といっている。すると他の者がのこのこやってきて、自分たちも見たらできようかと、私の書いたものをのぞきにきたが、書いてあるのはミミズの走っているようなものだから、びっくりしたものだったのです。その後を続けて書きたかったが、ラマンテは酋長なので忙しく、書くことができないでとうとう四十四日たちました。

明日は出発という日の夕方、「だんな、続きをやろう」と、ラマンテがきてくれたのです。夕方—樺太の夕方は早いから—三時頃だったでしょうか、焼酎びんを一本持ってきて—この叙事詩は酒を飲んで酔い、異常意識で夢幻の境地に入って光景を目に浮べながらうたうものらしく—酒がなくてやらなかったのを、やっと手に入れてきてくれたのです。とうとうこれで徹夜してしまいました。樺太の夜は三時頃から夜が明けますが、明かるくなっても終わらず、もう昼頃かと思ったら九時でした。そして、ちょうど「だんな、迎えの船がきました。」といわれた時終わってくれたのでお礼のしようもありません。学生時代の冬の外套を着ていっていましたので、それをお礼におやじにやりました。一夏、部屋を借りて寝起きしましたが、枕はノート・ブックを使い、夜具はなくして冬のメリヤスシャツを二枚ほど着て外套を掛けて寝たので、睡眠は三時間位しか取れませんでした。アイヌたちが遊びにきて帰ってから調べ物を整理して寝るのですし、夜明けが早く、目が覚めると書いたことを覚えこんでしまわなければいけません。いっしょう懸命で気が立っている時は何の障りもないもので、食物はみそと米を舟着場で買っていったきりで、魚が無限にとれ、マス一匹取ると一日食べられるから、それだけの食物で明け暮れ、まずいもうまいもあったものではありませんでした。しかし、私は四十五日の滞在でふとっておりました。

こうして喜び勇んで帰ってきたのですが、さて東京でいよいよアイヌ語研究に身を委ねようか、どうしようかと、実は汽車の中で

も考え明かしてきたのでした。いままでアイヌのことといったら、あのみじめな暮らしを外から見てきただけの報告だけですから、無学文盲、無知もうまいの民としてばかり取り扱って、アイヌ文化の存在など考えている人はありません。また叙事詩があることはだれもいっていません。そこでこういうもののあることに気付いたのは因縁だから、記憶しているものをある限り求めて、記録に止めないではいられない情熱が起こってくるのですが、いかんせん東京の真ん中で食っていけるかどうかわからない。第一希望をかけていてくれる親兄弟、親類にも、もう少しろくなものを調べていけば良いのに、と失望させるのがずいぶん辛かったのです。これは貧乏を覚悟でなくてはできません。みんな英語やドイツ語、フランス語などでヨーロッパの先進国のえらい思想に触れたり、優秀な文学で人間を造り上げていくのに、私が未開種族と取り組んで、一人取りのこされていく淋しさがやりきれなくもなるのでした。しかし、いま私がこれをやらなかったら、永久に取りかえしができなくなってしまうのがやりきれない。三日三晩汽車の中で考え続けたものです。東京へ着く日の朝でしたか、福島県あたりを走っているとき、東の方から太陽が上るのを見ながら、「よし、覚悟を決めた。中学校の先生なら幾らか月給が出る。それでそのひまひまにやっていけばやれないこともなかろう。そのうち父や母もわかってくれるに違いない。」と、やっと決心をして、明治四十年の十月末の朝、東京に着きました。

当時は七月に卒業するので、帰ってみるとみんな就職して時節はずれで職はありません。苦悶しながら、それでもとにかくアイヌに口伝えの文学があることを文章に書きました。中央公論の滝田樗陰が、第二高等学校時代の一年先輩で文学青年でありひじょうに好意をもってくれていまして私のアイヌの文学論をたいへん喜んで聞いてくれ、中央公論の四十一年の一月、二月、三月号に載せてくれました。

明治四十一年の四月になって、やっと海城中学校の国語の先生になれました。ちょうどそこへ啄木がきたので、中学校の教師の月給で二人前の宿賃を払って暮らしていたのですが、私も子どもたちの前で国語の講義をするのがおもしろくなって、一夏は啄木と話したり読んだり書いたりすることや、中学校のことの方が主となる傾向となり、アイヌ語のことなど忘れていたものです。当時、それまで学年制度であった大学が私どもの年から、今の単位制度にかわり、私たちが初の卒業生でしたが、言語学科の卒業生は何の先生の資格があるか決定していなかったのです。それで、その秋の十月に校長から教員免状を貰ってくるようにいわれて大学にいったら、「言語学は中学にはないから中学校の先生の資格はない。」という。「辞職でもしなければなりますまいか。」ときいたら、「そうでもしてもらわなくちゃあ。」という。それで辞職して帰ってきたのです。

そういう具合で、どうしてアイヌ語の研究をしてよいやらわからず、一つには啄木を救うためにも、私は決心しました。車で二度運んだほどの量の全部の文学書を一度に売り払い、文学青年を清算して、実は支那へいこうとしたのです。成都から国語の先生を求めていて、何んでもたくさん月給も出るし物価も安い、三年も

先生をしたら金を貯めて帰ることができるといっていたのです。そうして金を貯めて北海道に渡り、アイヌの研究をしよう、そう決心したのです。ところがたまたま三省堂が百科辞典を編集していて、各国の言語が出てくるのでその校正に言語学科の出身の者がほしいというわけで、金沢庄三郎先生のお世話になって仕事を得ました。支那へいかなくて日本で暮らせるならいいだろうという心持ちでしたが、それが私の今日まで続いている三省堂との関係のもとです。また中学校をやめると同時に、これはわずかな俸給でしたが、国学院から言語学の講義をしろといわれました。それで今日までの国学院との関係になったのです。

三省堂にいって帰ってきては、ユーカラと首っ引きです。古今東西のアイヌに関する文献をあさってユーカラを読み解こうとしました。五年間まる暗記するくらい読みましたが、これがわかりさえすればこの一ページの意味がわかるのにと思っても、それを質すことができません。しかし、どうしても北海道にいくだけのお金が手に残らないのでした。こうして苦心していた時に、明治四十五年がきたのでした。この年はいちばん悪い年で、結婚して初めて持った子どもを医者にも見せずに取られてしまい、啄木も四月十三日に死に、明治天皇も七月末におなくなりになりました。十月には父が死んでしまいました。だれのための勉強だ、だれを喜ばすためのいそしみだ、もう少しと思って親不幸を重ねているうち父が死にました時には、もう少しでアイヌ語なんかやめてしまうところでした。しかしそれと反対に、父をさえ犠牲にしたこの仕事をなまやさしいことで済むかと、この悲しみが、こんどは私のいそしみへ火を注いでくれました。しかも、この幾つも重った不幸の最後に、百科辞典の編集所が解散になり、失職して収入が一文もなくなりましたのもこの父のなくなった十月で、またまこの時上野公園で拓殖博覧会が催され、アイヌだのギリヤークだのオロッコだのが上野公園の池のはたに故郷で暮している通りの生活をして、博覧会の客に見せるためにきました。夢にまでアイヌのことを見て、わからない問題やことばをたずね、とんでもない答えをきいて本当かと思って目を覚まして読み返えす、そんなことまでしたあげく、不幸のどん底でアイヌがきてくれたわけですから、何が幸せかわからないものです。朝から晩までアイヌの所にいくことができたのでした。朝飯を食べたきり博覧会にいって、昼飯や晩飯などが、知らず知らず抜きになってしまうことも度々でした。午後十一時過ぎに家に帰り、昼飯とも晩飯ともつかぬお茶漬けをかき込んで、それでも満足でした。私がアイヌたちの前でユーカラを読むと、私の村にさえ知っている人がないくらいなのに東京に知った人がいるとは驚いたと、みんな喜んでユーカラを読むのを聞いてくれました。私はなにも彼等を喜ばそうと読んだのではなく、ここは何だ、ここは何のことだと要所々々を質して聞くためで、これによってわからなかったことがどんどんわかっていったのです。五十日間毎日かよいました。

無収入になった時でもあってどうかと心配しましたが、家の者が「せっかくの機会だから、遺憾なくひまを利用して毎日いって下さい。うちの方の暮らしはどうにかやってのけます。」といってくれました。この時に結婚着だのよい着物があったのなどみんな

どこかへ飛んでしまったのですが、そのかわり私は樺太のユーカラすなわちハウキをすっかり解釈することができました。忙しくさえしていると子どもが死んだ悲しみもまぎれると思ったので、「新言語学」の飜訳も頼まれて承知しました。この四十五年すなわち大正元年と翌二年は、私がいちばん苦しんだ時でしたが、「新言語学」ができ、樺太アイヌのハウキの訳註、「北蝦夷古謡遺篇」が出来ましたし、また、樺太で会った山辺安之助というアイヌが、南極探検に出かけるので東京にきて、私の家に寄ったのですが、南極から樺太犬を連れて帰った時にもきて、その一生を樺太アイヌ語で物語りました。それを私が飜訳して、日本語を本文にしたものに樺太アイヌ語のルビを付けました。樺太の子どもたちに自分の心情をわかって貰いたいという安之助の希望もあり、樺太アイヌ語はこういうものだという本が一冊もまだ世界になかったので、その新しい文献を作り上げようと、私は、一年かかって「あいぬ物語」一巻、付録に樺太アイヌ語の文法の大要と、樺太アイヌ語彙をそえたものを出版することができたのもこの年です。これが後に、私がアイヌ語をやっていることを認識されて、諸先生や諸先輩からかえりみられるに至った、因縁の年でした。

（次号につづく）

業界最古の

正史と経験を誇る

創業明治26年

加除式法規書

学校関係法令集

文部法令総覧

文部省会計便覧

教育事務要覧

公立学校共済組合関係法規集

東京都中央区銀座西7の1

電 (571) 2126−2129

帝國地方行政學會

(特殊教育主任官)

文初特	20	昭和34年度特殊教育学校就職奨励費国庫負担金に係る支弁状況報告調べ等について	9.22	初等中等教育局長	都道府県教育長
〃	588	昭和35年度設置予定特殊学級の調査について	〃	〃	〃
〃	597	昭和34年度精神薄弱教育全国協議会開催について	10.5	〃	〃
〃	20	昭和34年度特殊教育学校就学奨励費国庫負担金に係る第3—4半期分の概算交付について	10.9	〃	都道府県知事・都道府県教育委員会
〃	609	東日本ろう教育講座ならびにろう学校高等部学習指導要領作成研究会参加者の出席方法について	10.13	〃	都道府県教育長

大学学術局

(庶務課)

文大庶	642	昭和34年度私学研修員受入報告について	10.15	大学学術局長	国立大学長

(大学課)

文大大	582	昭和35年度工学入学者選抜要項趣旨徹底協議会開催について	9.15	〃	国公私立大学長・都道府県教育委員会・都道府県知事
〃	581	風水害等による被災学生について	9.18	〃	国立大学長
〃	604	国立大学図書館研究集会の開催について	10.1	〃	〃
〃	581	風水害等による被災学生について	10.6	〃	〃
〃	627	旧制医科大学について	10.7	〃	関係国立大学長
〃	617	東北、北海道地区大学一般教育研修会の開催について	10.9	〃	東北・北海道地区国公私立大学長

編集後記

冬の寒さも峠を越し、春の訪れもま近に感じられるようになりました。二月は、三月とは別の忙しさのある月で、学校の先生がた、あるいは生徒たちも最終学年は、進学や就職と落ち着かぬ日々を過すというのが実情です。

そして、このような時期には、それまでに学習したものについて、どれだけ学力が向上したかが、ひじょうに問題となってきます。そこで、今月は昨年九月文部省で行なった全国学力調査（国語・数学）の結果を検討していただきました。現場の先生がた、あるいは広く教育という仕事にたずさわっていられるかたがたに今後の一つの指導上の指針として、役立てていただければ幸いです。また、それとともに、この学力というものの考え方について、沢田先生に詳細に論じていただきましたが、これは学習指導の根本問題として、常に忘れてはならないものと考えます。

まえにも述べましたが二月には小学校は別として、それぞれ自分の進路を決定してきます。この時期は人生の転機として深い意義をもっています。今月号から二回にわたって掲載される金田一先生の「文学のあけぼの」は昨年校長研究協議会での講演で、出席者に強い感銘を与えたものですが、各方面からのご要望により、先生にお願いして速記をまとめたものです。この先生の真しな生き方というものから、われわれは学ぶところが大きいと思います。

ME J 9060

文部時報二月号 第九百九十号

昭和三十五年二月五日 印刷
昭和三十五年二月十日 発行

著作権所有 文部省

発行者 東京都中央区銀座西七の一 株式会社帝国地方行政学会

印刷者 東京都立川市曙町三の五五 株式会社行政学会印刷所

発行所 東京都中央区銀座西七の一 株式会社帝国地方行政学会 電話(571)二一二六〜九 振替口座 東京五七一

購読料

定価 一冊六十五円
送料 〃 四 円
一か年 七百八拾円 (送料不要)

ただし増大号、臨時号の場合は別に代金を申しうけます。なお購読の申込みは直接発行所、またはもよりの書店にお願いします。

文部時報

第991号

昭和35年3月

昭和34年度の回顧と展望
文教行政の展望　天城　勲…2
文部省機構と職員任命規定の改正　大臣官房…9
義務教育の充実と施設の整備　初等中等教育局…12
科学技術の振興と学生問題　大学学術局…22
社会教育法の改正と青少年の健全育成　社会教育局…28
施設整備とスポーツ技術の振興　体育局…34
調査統計とアジア地域への教育協力　調査局…40
施設整備計画の進展と私学振興　管理局…44
文化財の保護と活用　文化財保護委員会…49
東西文化の交流と相互理解　ユネスコ…54

文学のあけぼの(二)　金田一京助…80
アメリカ雑感　高橋真照…58

大学と就職
教員養成学部の問題　島津秀雄…64
就職の現状と解決の方向　小和田武紀…69
望ましい教師とその養成　伊橋虎雄…75

新段階にはいつたソ連の教育　川野辺敏…88

≪あれこれ≫
悪いことが好き　I……79
金属の重さと熟練度　S……74
誇りと社会的待遇　A……21

高等学校通信教育とラジオ・テレビ……8
文部省関係出版物リスト……57
文部省重要通達一覧表……96

表紙　斎藤洋子　カット　正木淳

文学のあけぼの（二）

―アイヌの叙事詩ユーカラについて―

金田一京助

そのうち私も母校の講師にしていただき、初めてアイヌ語の講義を文科大学でやりました。いくら大学があっても、さすがアイヌ語の講義のある学校は東大しかありません。もっとも東大でも聞く人は初めは十人ぐらいも出ますが、三学期になると二人ぐらいになってしまいます。このアイヌ語の先生は、年百円という俸給でもとより英・独・仏の語学の先生とは同日の談ではなかった。どうもアイヌ語の専攻では、たのみようもありませんから、自分から口をさがしにいったことはないのですが、そのうちに、言語学の講義に早稲田大学や大正大学から招かれ、実践女子専門学校の国文科でも言語学を教えにこないかということになり、五つも六つも学校を兼ねるようになりましたから、ひとりでに道がついてきました。

それよりも、博覧会にきたアイヌから、「沙流の紫雲古律というところに盲じいさんがいて、盲でないときから記憶がよかったが盲になってからは一度聞くともう忘れない。このじいさんのユーカラは沙流川下流第一だが、かねがね自分が死ねば沙流のユーカラがなくなるから、字を知っている人にあって書いてもらいたい。そうしたら死ねるといっている。だんなが汽車賃さえ送ってくれれば来年つれてきてあげる。」といってくれるのでした。私はこれを文科大学の上田万年博士に相談にいきましたが、上田先生は私がまたお願いのことばをいわないうちに「ぜひ呼びたまえ、汽車賃はいくらだ。」「十五円ばかりです。」「そうか。」といって、ポケット・マネーをぽんとほうり出してくださった。若かった私は心の中で、「この先生のためなら、死んでもいい。」と感激したものでした。

こうして盲じいさんを呼びました。むすこの春彦が生まれた年で、大正二年でした。この盲じいさんがやってきて、生まれて三か月かの子どもを手探りでだき上げたりして、これはうちのポイヤウンペだといってかわいがりました。ポイヤウンペというのはユーカラのヒーローで、赤ん坊のときからしだいに偉くなる物語りです。このじいさんは、どうせだんなに教えにきたのだからと、外人には話さない民族の秘密の神々の口伝、宗教的な教典となるような物語りをすっかり教えてくれましたし、英雄のユーカラも十四編教えてくれました。まだまだ知っていたのですが、盲目の夫婦だったものでかせぐこともできず家内の姉の家で養われていて、その姉の一家が流行病にかかったものだから、じいさんに祈禱をしに帰るように毎日手紙がきて、来年またくるからといってじいさんは帰ったのです。帰りの汽車賃がないから私は本を売って十五円ほどこしらえ、みやげに着物だの道具だのをこうりいっぱいに詰めて持たせ、来年くるのを楽しみにして帰しました。しかし、人々をみないやしたあげくに、自分が病気にかかって死んでしまったと聞いた時、悲しみの中から、私にあって口授してよかったと思って死んでゆけただろうと思いました。盲じいさんが私に教えてくれたのはやっと半分ほどだといっていましたが十冊のノート・ブックにいっぱいありました。このローマ字で書いたのを上田先生にお目にかけるとたいへん喜ばれて、日本でも文字のない時には語部が口伝えに伝えており、古事記二巻は稗田阿礼の暗誦を太安麻呂が筆記したといわれるが、一部の学者は、すでに文字があり暗記の必要がなかった時代ではあり、あれだけ暗記するのは不可能だと古事記の序文を疑う説が出ていた時だったものですから、アイヌのじいさんの頭に十冊のノートが収まることを見れば、暗記力に対する懐疑説をけとばすことができたと喜んでくださったのです。

私が母校の講師になりましたのは大正二年の秋でしたが、翌々年の大正四年には出張を命ぜられて、ふたたび北海道と樺太にいき、東西の海岸のあらゆるユーカラの伝承者を歴訪して、筆記を取って帰ってきました。この年は盲じいさんが死んでちょうど三年目にあたったので、その村に立ち寄って盲じいさんの第三年の行事をやろうと村の人にはかりました。村の人はたいへん感激して、盛大に第三年の行事を行なったのです。それまでは日本人の書いたものでも西洋人の書いたものでも、アイヌは死んだ人にはいっこうにかまわず、親の命日も知らず位牌もなく墓参りもしないといって、アイヌの宗教心などまるでないようにいわれていましたが、盲じいさんの語に徴して知るかぎり、アイヌの宗教は自然崇拝と祖先崇拝から成り立ちます。又ラッパというのは死んだ人の祭りのことで、年に三回の大祭はこれをシンヌラッパというそうです。私は盲じいさんの故郷の紫雲古律の村でなきじいさんのシンヌラッパをやろうといったのです。家の前のかき根のようなところが祭場で、そこに新しい御幣を立ててささげ物をして祈禱を唱えて祭り、夜は御幣を家の中に移し、そこで酒をくみかわしユーカラをうたったり舞踏をして仏を楽しませるのです。それは夜を徹してやるものでした。夜中の一時か二時、私は疲れたので座

を立って炉端へいって巻きたばこに火をつけていたら、隣りにいた少し薄のろでみなといっしょに酒席に並べられないでいた青年が、炉端でにやにやしながら私の顔をちらっちらっとみて、だれにともなくひとりごとでもなさそうに、「おかしかったな、盲じいさんがよ、先生から旅費を送ってきた時、『どんなもんだ、おいらふだん貧乏暮らしをしているけれど、いざとなると東京のだんなからお迎えがくるだぞ、帰りにはなあ、さつま芋の一俵もみやげにしてやらあ。』と、ほら吹いていったっけな。あはは、あはは」と笑うのです。「そうだったのか、それならそういってくれれば、なんとかしてそれぐらいのことはしてあげたのに。」と暗然としました。さらにその薄のろ青年がいうことには「だんなからもらったお金の残りで何を買うかと思ったら、糸をたくさん買ったものだよ。『東京というところは魚の高いところだった。世話になっただんなに裏の沙流川のシャケの一匹も送ってあげたい。』といって、若いころなれていたシャケ網を手さぐりですきにかかったものだ。二か月か三か月してできたが、それで毎日夜の一時ごろ起きて、沙流川で腰まではいってボチャリ、ボチャリ、シャケを追い回わしたっけな、あはは、あはは」と笑って「追っかけるほうに目がなくて、逃げるほうに目があるだもの、追っかけても取れなかったんだよ。かわいそうにな。沙流川に盲シャケの一匹もいてかかってくれりゃよかったのに、とうとう一匹も取らずに死んだっけな。あはは、あはは」というのでした。私もつり込まれて笑いましたがふいてもふいても涙が落ちて、やりきれません。私はたまらなくなって立ち上がり、盲ばあさん、養い手の姉のばあさん、盲じいさんを紹介したばあさん、この三人のところにいって、「盲じいさんのやったそんないい話をなぜお前たちは私に聞かせてくれないんだ。きのうきょう来たんじゃなし、もう一週間もたつのに。」と談判しました。しかし、三人のばあさんが異口同音に私に申しますには、「だんなさま、とったという話しなら申しもしますが。とらなかった話しをああした、こうしたといって、だんなの何のたしになりますか。それよりも、そんなことを耳に入れてだんなの顔をちょっとでも曇らせては、もったいないからいわなかっただけで、隠し立てしたのではないから腹を立てないでください。」こういわれては、私のほうが談判どころかたじたじとなりました。この人たちは、こうしてあらん限りの誠意を尽して、それが相手に通じなくても、だまってできる人たちなのですね。明るい時はシャケが逃げるので、夜中に星の光りで取る、それで盲じいさんは夜中の一時にいったのだそうですが、十一月を過ぎると北海道の川は凍るほど冷めたい時なのです。そんな時毎晩いったのですから、私たちなら輪をかけてもいわずにおれないところを、あの人たちは黙っているのです。私は、いままでに征服者の威を借りて被征服者の純情をいかにじゅうりんしてきたかという話しをかずかず聞いていたのですが、それに気づいた時、「せめて私だけでもこの人たちになにぶんの償ないをしなければならないのに…」そういう気持ちを起こさせられたものでした。

　このとき、私はすぐにも内地に帰ろうとしましたが、このだんなはアイヌのユーカラ、神々のユーカラを知りたくていらしっしゃったのだと、偉いばあさんが三人いて競争で教えてくれるのです。その時、畑へいこうと、ぼろぼろの着物を着てくわをさげてきたばあさんが、入り口に立って、昼になってもまだ畑にいかないでいたのが、いつの間にか上にあがってきたので「よし今度はお前だ。」とノートをそっちに向けたら、目を半分ほど閉じ静かに歌い出すのです。その声の良い、節のよい、ことばの美しかったこと。対句で、神様が現われる時あらしを起こして先立つ雲、おくれた雲、先立つ雲からはすでに大粒の雨やあられが落ちてくる。見る見る一天かき曇って、迅雷耳をおおいとまもない大あらしになる。そういうところなど、こんなばあさんのどこから出てくるのかと驚いたものでした。翌日もそういうばあさんがあった。聞いてみるとアイヌの文化の起源の物語りに羽衣伝説がはいってくるのです。人祖のアイヌラックルが神界に遊んで、たまたま天の女神が温泉に沐浴するものを見てその美しさに見とれ、着物を着ていなくなるのが惜しくてそれを隠す。けっきょくふたりは結婚してアイヌの元祖となり、アイヌ文化のもとを開く。そういう物語りでした。みればぼろぼろの着物を着た、まるでこじきのようなばあさんに囲まれているのですが、その口から響く古代の光景の中にいると、ひとりで経験するのはもったいないようでした。世の中の立身も出世も忘れ、「何という幸福だ。」と感ぜざるを得ませんでした。こうしたユーカラの名人は女流にあります。平安朝の文学は堕秀文学で、お姫様たちがあいう文学を残してくれたのを偶然のように考えますが、アイヌをみるかぎりでは、こうした文芸は女性が開いた感があるようです。

　そういう女性のひとり、南海岸第一の名人といわれた金成モナシノウクというおばあさんをたずねたのは、大正七年北海道開道五十年のお祝いのあった年でした。夕方になって旭川の効外の近文というところに着いたのですが、話し込んでいるうちに終列車が出てしまったのです。田んぼの道がとてもあぶないということで泊めてもらうことになりました。そこはヤソ教の日曜学校でしたが、七十になるモナシノウクと、長女の金成マツさんが四十三ぐらいだったでしょうか、十六になる養女の知里幸恵さんの三人が住んでいました。マツさんは十八才の時から七年間函館の伝道学校で教育をうけ、ローマ字も英語も、標準語や漢字やかなも知っていました。三人の女性の生活なので男子がきてもとめることは法度だったらしいですが、「先生は別だよ。」ということでとめてもらいました。お隣りに土人学校の校長だった佐々木長左衛門さんのおうちがあり、幸恵さんがかけ合ってくれましたがだめらしく、「あしたの朝先生にさし上げる物がない。」ということでしたが、「じゃが芋を塩うでにしたのでけっこうです。アイヌ部落では一日それを食べてとまるのですから。」といったものでした。「宿貸さぬ人のつらさもなさけにて思わぬ山の花の下臥」という古歌がありますが、私もその夜佐々木長左衛門先生のところにとめてもらっていたら、あるいは私の後半生はすっかり変わっていたのかもしれません。

　「むさくるしいですけれどがまんしてくださいますか。」と、幸恵さんが次の間に大きなかやを取って新しい敷き布をしいた床を取ってくれたので、「じゃお休みなさい。」といって寝ました。疲

れていたもので一寝入りしたと思って目をさますと、すっかり日が上っていました。顔を洗って炉ばたにいくと、じゃが芋がいっぱいうだっていましたが、何だか炉ばたの様子が違います。私が寝る時にはなかったのにひのきの小さい枝の半分焼けたのがたくさんある。「おや、あれから皆さんいつかやに来て寝て、いつ起きたのですか。」ときいたが、三人とも顔を見合わせて答えません。それで聞いて、聞いて、やっとこの旅の風来坊を安眠させるために、三人の女性は、一晩中蚊やりをたきながら炉ばたにすわり明かしたことがわかったのです。私は、何としてこの人たちの旅人を愛する温情に報いようか、このすかんぴんのアイヌ語の学究が何をもって報いることができるのかと、悲しくさえなったのです。徹夜させた上にうるさくさせては迷惑だろうと考え、その日は早くいとまをしました。いとまを告げ、編み上げぐつのひもを結んでいる時でした。金成マツさんが「幸恵、ほかのかたではない先生でいらっしゃるんだから、お清書や作文をみていただきなさい。」というと、幸恵さんは照れていましたが、それでもわるびれずに持ってきました。みると清書も作文もうまいので、私が「こんなに日本語がよくできては、幸恵さんはかわいそうにアイヌ語は知らないでしょうね。」といったら、マツさんが「幸恵はおばさんのふところっ子で、片言のときからアイヌ語で成長しましたから、このごろではどんな年寄りにもまけないほどアイヌ語は達者なんですよ。おばあさんの口まねでユーカラも少しはやります。」というのには驚きました。幸恵さんはおかあさんのことばを否定も肯定もせず聞いていましたが、急にひざを乗り出してきて、「先生、私たちのユーカラのために先生は貴重な時間とお金をお使いくださってご苦労なさいますが、ユーカラはそれほど値打ちのあるものなのでしょうか。」―そのことならいままで何人かの人に話したし、いいたいことがむかむかするくらい胸にあるので、くつひもを結ぶのも忘れ、「あなたがたはアイヌといわれて、まるで無知もうまいで犬と人間のあいの子のようにいわれている。しかし、このユーカラは、あなたがたの祖先の武勇伝をいつだれが作ったともなく詩の形にして歌い伝えている。こういう偉大な長編を持ってとるということ、それだけでもあなたがたが決して劣等の種族じゃない証拠なのだ。昔ヨーロッパでは、ギリシャ人やローマ人はそれを持っていた。東洋ではインド人が『マハーバーラタ』と『ラーマーヤーナ』という叙事詩を持っていた。朝鮮人も満州人も支那人も蒙古人も日本人も持っているだろうか。あなたがたがこれを持っているというのはすばらしいことだ。そればかりじゃない、ヨーロッパではあなたがたを白色人種の別れだといっている。毛が多いといってはばかにされていたけれども、それは白色人種が東洋に残ってアイヌとなったためで、これがいま定説化しつつある。肩身のせまい思をすることはない。毛の多いこともヨーロッパに生まれていたら大いばりだ。あなたがたは東海の離れ島に、文化の光りの及ぶことがおそかったばかりに、大古さながらの生活をしていたのである。私は二千年の昔に生まれかえらなければみることのできないことを目の当りにみて、驚きと喜びと賛嘆でいっぱいなんだ。だから私は全しょうがい、全財産を傾けても惜しくない。ただあなたがたは違う。

あなたがたは古いことにかかわりなく新しいことを勉強して、日本人としての自覚の上に後ろ指をさされないよう暮してください。私はあなたがたの後ろから落ち穂をひろう気持ちでこれをやっているんです。」というような意味のことを話した時、幸恵さんは大きな目いっぱいに涙をためて、「先生、初めてわかりました。ありがとうございます。私たちの種族のことは何でも恥ずかしいことのように思っていましたが、縁もゆかりもない先生がご苦労なさってくださるのに、それに気づかずにいましたのは何という愚かしいことでしょう。私はこれを境に祖先が残してくれたユーカラの研究にしょうがいをささげる決心をいたします。」といいました。これが十六そこそこの娘さんの口から出たことばです。私はたじたじとなったものでした。「おお幸恵さん、いい所に気づいてくれた。いまに、おじいさんやおばあさんでなしに、あなたに聞きにきますよ。」と、大おごりにおごったつもりで、そういって別れたのですが、四年の後、ほんとうにこの人に教わるようになったのには驚きました。幸恵さんに初めて会った当時は、旭川の女学校の一年生でしたが、やがて女学校を卒業して、神々のユーカラ十四編をノート・ブックに書いたのを手みやげに大正十一年、東京にやってきたのです。この幸恵さんの語学の力、天才だったのです。私が十何年勉強してもなおアイヌ語の文法のわかりかねているところを尋ねますと、袋の中の物を取り出すようにあとからあとから幾つでも同様の例をあげて、きれいに説明してくれたものです。

私は、昭和六年に「ユーカラ研究」の二冊目を完成し、その巻頭に書いたユーカラ文法のくわしい研究が学位論文となり、恩賜賞をいただきましたが、あの知識の多くのものは二十才になる幸恵さんの示唆によって得たものがたくさんあったのです。この幸恵さんが女学校にはいった時には「ここはあなたのくるところじゃないわよ。」と同級の人たちからのけものにされたのだそうです。それまでアイヌのこどもは小学校だけで女学校にはいったものはなかったからでした。うっかり「おお寒い。」などというと、「そんなに毛皮を着ていても。」などいわれるので、帰りには涙をポタポタ落して帰ったものだそうですが、朝になると、うらみに報いるに徳をもってする、それが自分にできるか、神様が私をこういう境遇にお生みになったに違いない。「神様、私にできないまでもやってみます。」そう思い直して学校にいきいきしたのだそうです。そして困っている人には手伝ってあげたり、わからない事をやさしく教えてあげたり、悪口をいわれてもがまんをして通したら、三学期には、生徒からも先生からも「まあ、あの子は…」と注目されるようになり、二年生になると、同級のお嬢さんたちは幸恵さんを級長に選んだそうです。北海道ではどうかすると、アイヌはエゾで「ひと」ではないよう、人の概念に入れられませんが、そのエゾの娘さんを自分たちの級長に選んだのです。きのうの非をさとったこのお嬢さんたちの純情には私も打たれます、偉いと思います。このことはいつか北海道新聞の短編小説に出たことがありましたが、それは幸恵さんが死んでからのことでした。

ところが天命と申しますか、幸恵さんはおとうさんの心臓病を

遺伝していて、それが東京の暑さに悪化して、その書いてきた神々のユーカラ十四編を「アイヌ神謡集」として一冊の書物にまとめて出すための最後の校正のペンを置くと同時に、心臓まひを起こして私のうちでなくなりました。ぱあっとしゃぼん水のようなあわを、果てしもなくはいてなくなったのです。びっくりして「幸恵さん、幸恵さん」と大きな声で呼んだとき、細い声でかすかに「はーい」と返事をしたのが最後で、永遠にあの世の人になってしまいました。天から恵まれたただ一粒の宝玉を手落しいたしましたこの罪は、どんなことをしても償なわれることはないのですが、それだけならまだしも、おばあさんが「幸恵が死んだ、幸恵が死んだ」と毎日朝から晩まで泣いて食ものどを通らなくなり、とうとう床についてしまったそうです。何とかよくなってもらいたいと思いましたが、けっきょく一年後には孫娘のあとを追ってしまいました。それまでに金成マツさんから、どうも老母もだめになり、あんまり悲しむのでユーカラをやっても混じてしまって正確にはできなくなりました、という手紙はありましたが、南海岸で一等といわれるこのおばあさんから、私がまだ一ページも筆記しないうちに、なくなってしまったのでした。

幸恵さんの死んだのが震災の前の年、大正十一年でしたから、その第七年は昭和三年でした。金成マツさんは、幸恵の七年祭には東京にいって墓参りをします。その時には老母のユーカラをだいたい覚えましたから先生にお伝えします。という手紙をくれて、松葉づえにすがって、私に教えにきてくれました。しかし、北海道へいきますと、私は朝から晩まで聞いて筆記をし通しますのですが。東京では、学校があり、学会があり、毎日不在がちで、少しも筆記をするひまがなく、十日あまりもたちました。このおばあさんは以前は、書かなくても忘れませんといって書こうとしなかったのですが、私の留守の間に、退屈しのぎに、自分の帳面へ、昔習ったローマ字でユーカラを書き出したのです。それを私が学校から帰って読んだら、たいへん喜んで「私の書いたものでも先生はそのようにお読みになれますなら何も先生をわずらわすことがありません、私が書きます。」といって、書きも書いたり、北海へ帰っても書きつづけて、およそ昭和三年から昭和十九年に至る十七年間、実にりっぱにローマ字で書いた帳面七十二冊、一万五、六千ページにもなりました。たいへんな根気です。これを戦争中に焼くまいとどんなにかほねをおりました。それを知って、国学院大学日本文化研究所では、私の筆記した三、四十冊のノートも加えて全部マイクロフィルムに撮り、次いでポジチーブに焼きつけて、二通の副本を作ってくれ、ついでに私に翻訳させようということになりました。訳して出版するとしてどれぐらいかかるかと三省堂に値踏みさせると、三千万ということでした。それで三千万じゃあといったら、研究所の理事が「材料さえありゃあ金のほうならどうにかしようじゃないか」といったそうで、これが、日本文化研究所の研究事項と計上されたものだそうです。ところが、アメリカのロックフェラーがきて、日本の私立大学の研究を補助したい、何をやっているか出せということで、国学院大学がこの研究を出したのです。すると、これはほんとうの日本の研究なので補助したいといって、この大きな金が出ることになったと聞きます。

話しが多少前後しますが、幸恵さんの弟でいま北海道大学教授、文学博士の知里真志保氏のことを加えたいのです。幸恵さんはかねがね、自分は頭が悪くて、お手伝いもできませんが、弟なら、いくらか先生のお役にも立つかと思います。といっていたのを思い出し、幸恵さんの死後弟の成長を待っていました。中学校を卒業するまで待って、いってためしてみるとおそろしくよくできるのです。それでぜひ奨学させたいと思って呼びましたが、第一高等学校にいっぺんではいりました。語学はやはり天才的で、英語もドイツ語も最高点で通し、大学にはいって私の講義を三年聞きました。三年目には、私も試みに、「今日は真志保君に皆で教わろう」と、ユーカラの講義の時など真志保君を教授のいすにすわらせて私が学生といっしょに聞いて見たりなどしたこともありますが、機知縦横にみなを笑わせておもしろく講義をしたものです。大学在学中にアイヌ語の本を四冊出版し、四冊目を卒業論文にして大学を出ましたが、卒業論文を版にしたもので卒業したのは、大学はじまって以来、知里真志保君ただひとりだけで、二、三年前には鈴木大拙先生と並んで朝日賞をもらいました。現在はおばあさんの金成マツさんの筆記したノートの半分を北海道に送って私のユーカラ訳注の仕事を助けてもらっていますが、幸恵さんの予言どおり、この上ない援助で、校正までもみてくれて私の誤りを正してくれますおかげでどうにか誤りのない訳注ができつつあることを、ご報告することができます。また、金成マツさんにも、文部省から紫授褒章がおりて、これで幸恵さんもあの世でにっこり笑っていてくれるでしょうし、私もこうした人たちの恩詛にいくらかでも報いることができたような気がしまして、心からうれしく思い、これもみなさんの前にご報告申し上げたいと思います。

（日本学士院会員、文学博士）

現場教師待望の書
立案・計画・実施のために!!

文部省初等教育課長　上野芳太郎編著

改訂 小学校教育課程講座

第1学年～第6学年　各1巻（全6巻）
各学年1冊（計6冊）　定価各¥200

学年別に問答式を採用
移行措置の問題を解明

文部省初等教育課の専門担当官が分担執筆した唯一の書！

本書の特色

① 対象
この本は、あくまで現場の先生方を対象とした唯一の参考書であります。

② 問答式
この本は、第一学年より第六学年までを学年ごとに一冊にまとめてあり、しかも問答式を採用して問題を深く掘りさげてありますから、あらゆる点で便利です。

③ 専門担当官の執筆
この本は、改訂学習指導要領の作成に当った初等教育課長以下十六人の担当官が、それぞれの専門の教科を分担執筆されたものですから、この本によって文部省の正しい解説に接しられます。

④ 併せて移行措置
この本は、その学年の最も基本的な問題から、きわめて具体的な指導の問題におよび、あわせて移行措置の問題にもふれています。

⑤ 各巻に該当学年の学習指導要領を収録

帝国地方行政学会　発行

文部省重要通達一覧表

（前号からつづく）

（視聴覚教育課）

文社視	250	昭和34年度視聴覚教育に関する調査について	10.5	社会教育局長	〃
〃	8	「教育映画等審査報告週報　(308～312)」	9.7	〃	〃
〃	9	「教育映画等審査速報　(165～171)」	9.16	〃	〃
雑社	128	米国大使館貸与機材の分解修理について	9.28	〃	〃

（著作権課）

文社著	93	著作権講習会の開催について	10.5	〃	関係都道府県知事・関係都道府県教育長・関係国公私立大学長・関係民間団体長

（社会教育施設官）

文社施	17	昭和34年度公民館等整備費補助金（公民館、図書館、博物館および児童文化センター分）の交付決定について	8.28	〃	関係都道府県教育委員会・関係都道府県知事・関係都道府県支出官
〃	24	昭和34年度社会教育特別助成金（青少年巡回文庫分）の交付決定について	9.21	〃	関係都道府県教育委員会・関係都道府県知事
〃	200	国立中央青年の家の開所について	〃	〃	国立大学長
〃	231	「青少年の読書指導のための資料の作成等に関する規程」の改正について	9.25	〃	都道府県教育長
〃	237	青少年向図書目録（1集）送付について	10.6	〃	〃
〃	249	第6回公民館活動実践記録懸賞募集について	〃	〃	〃

≪編集後記≫

春にさきがけて、三月は梅から桃へと花の始まる季節、太平洋に面した温暖な地方ではすでに桜の花のたよりが伝えられています。それにひきかえ、学校は学年末やら卒業式といつにも増して多忙な折かと思います。もっともそうした多忙さの一段落したあとで、ほんのしばらくの間ですが四月の入学式まで、学校は、一年のうちでいちばんひっそりと静かな時期を迎えるわけです。この一年間の反省と、きたるべき年への計画と希望とのために、その静まりかえった一時期は有意義なようです。

今月号は、例年の通り昭和三十四年度の文教行政と省内各局の「回顧と展望」の特集号としました。これについては、あまり例年の特集でもあり、もっと外の企画でやっては等の意見もありましたが、年間を通じて各局の事業を見渡すじゅうぶんな機会もこれをのぞいてはなく、予算の決定をみたので、昭和三十五年度に対する展望の上に重点を置いて、今度の特集としました。

ほかに、「大学と就職」の三つの原稿は、特に教員養成学部の問題を、その養成機関である大学の側から、その選考機関である教育委員会から、さらに現場の学校長の立場からの意見を、一般的なものとするために、それぞれ同一の地方とか県の場合でない先生方に執筆して頂きました。このほかにもいろいろご意見とかご感想とかがあると思います、編集部宛お送り下さいますと今後の参考にもたいへん有難いと考えます。

なお、文部時報では近く別冊として当用漢字と送りがなのつけ方（当用漢字学年別配当表ならびに筆順等を含む）の刊行を予定しています。ご利用頂きたいと思います。

MEJ6091
文部時報三月号
第九百九十一号
昭和三十五年三月五日　印刷
昭和三十五年三月十日　発行
著作権所有　文部省
発行者　株式会社　帝国地方行政学会
東京都中央区銀座西七の一
印刷者　株式会社　行政学会印刷所
東京都立川市曙町三の五五
発行所　株式会社　帝国地方行政学会
東京都中央区銀座西七の一
電話(571)二二二六～九
振替口座　東京五七一

購読料
定価　一冊六十五円
送費　〃　四　円
一か年　七百八十円
（送料不要）
ただし増大号、臨時号の場合は別に代金を申しうけます。なお購読の申込みは、直接発行所、またはもよりの書店にお願いします。